

第1回福井県産業教育審議会 議事録

- 日時 平成20年11月25日(火) 15:00~16:35
- 会場 福井商工会議所 会議室A&B
- 出席者 委員：浅野委員、江守委員、巨田委員、笠嶋委員、加藤委員、清川委員、国田委員、清水委員、城野委員、瀬尾委員、田中委員、谷委員、増永委員、松倉委員、松山委員(15名、五十音順)
- 事務局 広部教育長、伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹(学校教育)、山内教育政策課長、中島高校教育課長、尾方高校教育課長補佐

○開会

尾方総括 ただ今から、平成20年度、第1回目の福井県産業教育審議会を開催いたします。皆様方には、大変お忙しい中、会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、委員各位におかれましては、ご多忙にも関わらず、委員就任をお引き受けいただき、重ねてお礼申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、広部教育長からご挨拶を申し上げます。

○教育長あいさつ

広部教育長 今日は、ご多忙のところ、第1回目の福井県産業教育審議会にご出席を賜り、厚くお礼申し上げます。

また、ただいま、申しましたが、委員各位におかれましては、ご就任をお願いしたところ、快くお引き受けいただき、厚くお礼申し上げます。

また、ご承知のとおり、現在、教育界におきましては、教育基本法改正をはじめとして、教育関連3法案の成立など大きな変革期の中にごございます。また、近年少子化に伴う生徒数の減少であるとか、産業構造・就業形態の変化ということで、高校教育界においても、こうした社会の変化を踏まえた対応を迫られているのでございます。

特に、これから、10数年を見通しますと、入学する高校生の数が非常に減ってまいります。ちなみに、高校に入る生徒の数が最高のピークだったのは、平成元年だったのです。1万4千人ほどいたわけですが、昨年生まれた子どもたちが、高校へ入学するころは、半分の7千数百人に減ってしまうという厳しい数字が突きつけられているわけでございます。先般、福井県高等学校教育問題協議会、いわゆる高問協におきまして、今後の県立高等学校の在り方についてご審議をいただきまして、答申をいただいたところです。

特に、子どもの減少に伴う高等学校の再編問題、定時制・通信制の改革問題、もうひとつ大きな課題は、職業系教育をどのように対応していくかです。といたしますのは、多くの議員、委員からも今の職業教育は、必ずしも、今の皆様の企業のニーズにマッチしていないと厳しいご意見を多々いただいたわけでございます。

このような理由で、3点に付きまして、ご議論をいただき、高校教育の具体的な改正についていろいろ検討し、具体的方策等に決めていかなければならないわけであり、皆様方におかれては、この答申を踏まえて、本県の職業系専門学科の在り方について議論をいただきたいと思う次第であります。

皆様方それぞれのお立場から、幅広いご意見をいただくことをお願い申し上げます。

一言開会のあいさつとさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

○委員の紹介

尾方総括

それでは、本日ご出席の委員の皆様をご紹介します。
会長席に向かいまして右側より、ご紹介させていただきます。
福井県商工会議所連合会会頭の江守委員でございます。
福井県産業教育振興会会長の増永委員でございます。
福井県経営者協会副会長の清川委員でございます。
福井県農業協同組合中央会専務理事の松倉委員でございます。
新道繊維工業株式会社執行役員の加藤委員でございます。
福井県産業労働部技幹の笠嶋委員でございます。
福井県立福井農林高等学校長の浅野委員でございます。
次に、左側に移りまして、
福井工業大学学長の城野委員でございます。
仁愛女子短期大学生活科学学科教授の谷委員でございます。
福井県立大学経済学部准教授の清水委員でございます。
前福井県教育委員会教育委員で農園経営の瀬尾委員でございます。
福井工業大学附属福井高等学校長の巨田委員でございます。
前福井県立小浜水産高等学校長の国田委員でございます。
福井県立武生商業高等学校長の田中委員でございます。
福井県立科学技術高等学校長の松山委員でございます。

なお、福井大学副学長の中川委員および福井県農林水産部技幹の山田委員におかれましては、本日、所用のため欠席させていただきたいとの連絡をいただいております。

○会長選出

尾方総括

それでは、議事に入ります前に本会議の会長ならびに副会長を選任させていただきたいと思っております。福井県産業教育審議会規則第三条におきましては、審議会は、会長および副会長1名を置く。会長および副会長は、委員のうちから互選するとなっております。そこで、まず、会長をご選任いただき、次に、副会長お一人をご選任いただきたいと存じます。

では、会長の選任に入らせていただきます。選任の方法はいかがいたしましょうか。

瀬尾委員

江守会頭をご推薦します。

尾方総括

ただ今、瀬尾委員から、江守委員を会長にとのご推薦がございましたが、いかがでしょうか。

各委員

異議なし。

尾方総括

異議なしとのことでございますので、それでは、会長は江守委員にお願いしたいと思います。江守委員、よろしくお願いいたします。

江守会長には、正面の会長席へのご着席をお願いいたします。

尾方総括

それでは、江守会長より一言ご挨拶をお願いいたします。

○会長あいさつ

江守会長

入室いたしまして、しばらく審議しましたら、いきなり会長にご推薦をいただきまして、大変恐縮に存じるしだいでございます。あまり、今回の内容について勉強しておりませんので、皆様方のお助けがないととてもこの重要な役職は全うできないので、どうかご協力を賜りますようお願いいたします。

私は、今、福井県の商工会議所または県の経済連団体等を仰せつかってさせていただいているわけですが、職業系高校はある意味でこれからの日本の進路を決めるのではないかと。また、今日まで日本が強かったのは、この力が強かったからではないかと。それが、強い産業を持つことになり、日本が世界に展開してきたのだらうと思うのです。そういう意味で大変重要であります。そういう姿が、最近、姿が変わりつつあるという気運が出てきたのではないかとと思うのです。

今後の県立高等学校の目指すべき方向性について、福井県高等学校教育問題協議会が答申を出されました。その中で、社会や生徒のニーズに対応した職業系専門学科の在り方についての方向性が示されております。本審議会ではこの答申を踏まえて、本県の時代の変化に対応した職業系専門高校の振興・充実に向けた具体的な方策・方向について協議を進めてまいりたいと考えているわけでございます。

今、各先生方のご紹介をお聞きしましたら、その道のエキスパートの先生方ばかりが一同にお揃いになっており、いろんな問題点がこの会場の中から沸き出してくるだろうと期待を申し上げているしだいでもあります。各委員の皆様には、それぞれの専門的なお立場から、忌憚のないご意見を是非お願い申し上げたいと思うしだいでもあります。

会長に選任されました挨拶として、以上の形でのご挨拶とさせていただきと思っています。よろしくお願い申し上げます。

○副会長選出

尾方総括

ありがとうございました。

次に、副会長をご選任いただきたいと存じます。選任の方法はいかがいたしましょうか。

清川委員

会長に一任します。

尾方総括

ただいま、清川委員から会長に一任する旨のご発言がございましたが、いかがでしょうか。

各委員

異議なし。

尾方総括

それでは、江守会長から副会長のご指名をお願いいたします。

江守会長

それでは、ご一任のご支持がありましたので、審議の内容が職業系専門学校の在り方ですので、その方面にご精通されている学識経験者の中から、私どもが存じ上げている福井工業大学学長の城野先生に副会長をお願いしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。また、議事進行につきましても、城野副会長にお願い申し上げたいと思っております。よろしく願います。

尾方総括

城野副会長には、副会長席へのご着席をお願いいたします。

それでは、城野副会長様より一言ご挨拶をいただきたいと思っております。

○副会長あいさつ

城野副会長

ただいま、江守会長様から、副会長をせよとご下命がありましたので、どこまで大役が全うできるかわかりませんが、精一杯努めてまいりますので、よろしく願います。

します。この会議は、先ほど教育長さん、会長さんからお話にありましたように、今、社会が非常に大きく変わろうとしている中に、しかも、少子化の中で、福井県の職業系高等学校の教育をどのようにしていくかについて、在り方を検討せよとのことでございます。こういう意味で、高問協の答申が出ておりますので、それを受けながら、皆様方の、非常に広い視野から忌憚のないご意見を賜りまして、これをどのように解決していけばよいか建設的・前向きにこの議論を進めてまいりたいと思っております。その点、委員の皆様のご協力をお願いいたします。

尾方総括 ありがとうございます。

それでは、今後の議事進行につきましては、城野副会長様にお願いすることいたします。城野副会長、よろしくをお願いいたします。

○議事進行

城野副会長 それでは、早速でございますが、議事の進行も私の方でとのことですので副会長の立場ですが、議事の進行を進めたいと思っておりますのでよろしくをお願いいたします。

○高問協答申の概要説明

城野副会長 それでは、まず、10月16日に、福井県高等学校教育問題協議会いわゆる高問協から答申されました今後の県立高等学校の目指すべき方向性の概要説明をいただきまして、それを基に協議を進めたいと考えます。それでは、まず、高問協の答申について、事務局から概要説明をお願いします。

中島課長 高校教育課長の中島です。座らせて説明をさせていただきます。

高問協の答申概要説明の前に、福井県産業教育審議会につきまして、簡単に位置付けを説明させていただきます。次第の4ページ目をおめくりください。

産業教育振興法第11条によりが設置根拠となっております、どのようなことを審議するかは、同法の第12条、産業教育に関する重要事項について調査審議または建議するとなっております。よろしくをお願いいたします。そこに、今回の重要論点を挙げさせていただきましたが、このように進めさせていただくとありがたいと思います。

それでは、高問協の答申につきまして、概要説明をさせていただきます。先ほど、教育長からもお話がありましたが、昨年、平成19年12月の県教委から、「今後の県立高等学校の目指すべき方向性について」と、諮問をさせていただき、8回にわたり、審議を重ねて、平成20年10月16日に答申を受けました。

それは、大きな社会の変化、グローバル化等の変化の中で、高校教育がどう対応できるか。もう1点は、大きな変化の中で、先ほどもありましたが、大きな現象があるということがあります。平成元年から昨年度生まれた0歳児の年代減少率が約47%という状況があります。高等学校の小規模化をもたらしています。実際のところ、職業系学科はだいたい1学科1学級のぎりぎりのところまで来ているのが現状です。

- 1 職業系専門学科の在り方について
- 2 定時制・通信制課程の在り方について
- 3 学校規模・配置の在り方について

で、審議をしていただきました。本県の地域や産業を担う人材育成が大きなポイントであります。

では、参考資料の最後のページを見ていただきたいと思います。県立高校におけます学科別の県内就職者数の変化ということで、平成15年と平成20年のデータを出させていただきました。この5年間で県内に就職する生徒が約150人減っているわけですが、そのうち、職業系学科では、895人が県立の職業系高校から県内に就職しています。全体が1,050人ですので、今後、あつという間に1,000人を切っていくことがどんな意味を持つのかを踏まえていただいて、議論していただきたいと思いますので、このデータをつけさせていただきました。

そのような中、職業系専門学科の在り方で、社会人として求められる基礎的資質の能力の定着、文部科学省が言っています将来のスペシャリストの育成、3点目に多様な学習のニーズの対応が必要であります。以上の職業系高校の在り方の論点が出されました。少子化の中で、このようなポイントをどう具体化するかの中で、1点が、拠点校の設置を論点として出させていただきました。

拠点校と申しますのは、多様な農業、工業、商業において、職業教育のセンター的役割を果たす、できる限りの学科を配置したいとの位置づけをさせていただきました。

次に、今回の論点でもお願いしております、総合産業高校の設置を上げさせていただいております。他県におきましては、少子化の中、再編の中で総合学科の設置を手法としたことがありますが、福井県の場合は専門性を持つ中、専門学科の統合で専門高校の在り方を考えました。それが、総合産業高校であります。メリットは、例えば工業を軸にししながら、他の学科も学べるというプラス面が見られます。専門をしつかりと学ぶ中で、他の学科も選択できる。もう1点は、福井県の場合、兼業農家が全国一と高いことを踏まえ、このような在り方はそれなりに意義があるのご議論をいただきました。

さらに、統合再編だけではなく、新しい時代の変化に対応した、本県の特徴を生かした新しい学科の設置についても検討すべきであると指摘されました。福井県は、全国有数のエネルギー供給県であり、環境・エネルギーの科、県が食育を打ち出している中で食育、食文化について、また、福井県がものづくりにおける学科、その他、地域の特色であります観光や情報などを考えるべきのご議論をいただいております。

定時制・通信制の在り方については、ものづくりことなども学ぶ必要があるのご議論をいただいております。

学校規模・配置の在り方については、福井県の県立高校では、学年3学級規模が3校ございます。学年4学級の学校が8校あります。学年5学級が6校あります。ここには、普通科も入ってきていますが、学年3～5学級の福井県の県立高校が、30校の過半数である17校が入ってきています。ポイントの1つは、平成34年の中学卒業生推移予想で7,200人という数字があるのですが、その後も生徒数が減少傾向にあるという大きな課題がございます。その中で、1学級当り適正規模をある程度の学校規模で確保していきたいと考えております。福井県においては、1学級当たり36人、職業系においては30人程度確保したいと考え、いわゆる少人数学級教育の充実を図っていきたい。また、1学年当たりの学級数を4～8との形で定義させていただきました。こうした状況を踏まえ、本県の全日制県立高校においては、1学年4学級～8学級程度を適正な学校規模とし、この適正規模を継続的に維持するため、1学年当たり少なくとも5～6学級程度の学校規模を確保することが望ましいと審議させていただきました。

その中で、生徒数の減少に地域差があるということでございます。福井・坂井地区と丹南地区はまだ、しばらく緩やかな減少となっております。福井・坂井地区は、平成元年3月の6,669人をピークとして、平成10年は5,122人まで減少、平成20年は4,143人となり、平成34年は3,683人と推定され、ピーク時の約45%の減となります。奥越地区については、中学校卒業生数は、昭和63年3月の1,187人をピークとして、平成10年には949人まで減少し、平成20年は688人となり、平成34年は444人と推定され、ピーク時の約62%の減となります。奥越地域の高校は現在4校ありますが、再編は緊急の課題かとの認識でございました。嶺南地区については、中学校卒業生数は、平成元年3月の2,384人をピークに平成34年は1,303人と推定され、ピーク時の約45%の減少となります。

最後になりました、魅力ある学校づくりに向けて、現在1学年3学級以下の小規模校や分校については、答申の中で提案した適正規模の確保に努め、学校の活力向上を図っていくべきと考えます。小規模学校は、生徒会費や部活動の種目の減少や基本の学業におきましても、選択科目の幅が狭くなるとの認識があります。反対に1学年9学級以上の大規模校についても、今後、生徒数の減少にあわせ、順次学級数の調整等を行い、学校規模の適正化を図るべきであります。

さらに、具体的検討を進めるに当たっては、県内各地域の実情等に配慮する必要がありますが、何よりも、社会のニーズが多様化する中、高校における職業教育への期待に十分応えるとともに、生徒たちが意欲を持って主体的に学び、自信と誇りを持って将来社会へ巣立っていくことができる教育環境を提供することに主眼を置くべきと考えます。そのためにも、教員の人材確保と施設・設備の充実が必要であり、教員間の交流・民間活力の利用がうたわれております。できるだけ早い時期に、整備計画の策定に向け、具体的な検討を行うべきと考えます。

また、今後は、必要に応じて、普通科、理数科・国際科などの普通系専門学科についても、望ましい在り方の検討を必要と提案していただいております。以上を踏まえまして、本日の第1回福井県産業教育審議会でご議論をお願いしたところでございます。

論点1 職業系専門高校で何を学ぶべきか。教育の内容と方法について

論点2 地域の特色を生かした総合産業高校の学科はどうあるべきか。

論点3 本県の高校において、設置が望ましい学科はどのようなものか。

のご審議を賜りたく思います。よろしく申し上げます。

○答申内容の意見・質問

城野副会長 どうもありがとうございました。ただいまは高問協の答申の内容について概要をご説明していただきましたけれども、今の概要説明につきまして何かご意見ご質問はございませんでしょうか。高問協の委員の中には清川委員と瀬尾委員が入っておられましたが、何か聞かせていただけることはありませんか。

清川委員 今回の概要については何もありませんが、後にこの高問協の答申の中には職業系専門高校の教育の内容および方法について、地域の特色を生かした総合産業高校の学科の在り方について以下の3項目がありますので、この中でお話しさせていただこうかと思っております。

城野副会長 瀬尾委員はいかがでしょう。

瀬尾委員 別にございませんけれども、実際に、書いてありましたように早急に取りかからなければならぬということになったので、それだけは重点的にお願いしたいと考えます。

城野副会長 何か全般的にこれはということはございませんか。
県の産業教育振興会の会長をしておられます増永委員はどうでございますか。

増永委員 私の方も職業系、このことにつきましては何もございません。

○論点1 協議

城野副会長 それでは、総合的にということでは難しいと思いますので、今ご説明にありましたように3点の審議が求められております。まず、資料の11ページにありますように職業系専門高校で何を学ぶべきか。その教育内容と方法について、それから、論点2として地域の特色を生かした総合産業高校の学科はどうあるべきか。論点3として本県の高校において設置が望ましい学科はどのようなものかのこの3つについて議論をしていただきたいという提案でしたが、この件はよろしいでしょうか。

今のご説明について、もう少しこういうことも本審議会で議論すべきでないかということがございましたらご提案いただきたいと思います。

何か。はい、どうぞ。

清川委員 私も10月まで高問協の委員をさせていただきましたので、一番初めに言わなければいけないかと思って座っていたのですが、この中で職業系専門高等学校の教育の中でその教育内容および方法について話してもよろしいですか。

城野副会長 今は、この1、2、3についてこれからどういうことをやるかどうかをお願いしたい。

それでは皆さんよろしいでしょうか。

それでは早速でございますが、この論点1の議論に入らせていただきます。

清川委員 失礼しました。今のこの件ですけれども、私の一存で、また言っていると思われるかもしれませんが、今の高等学校の職業系といいますか、専門高校といいますか、何か中途半端な職業系専門高等学校のような気がしています。常に私は言っているのですけれども、例えば、土木科で測量を習うと、測量士補の試験は必ず受かるのですけれども、測量士となるとほとんど何年かに一人ぐらいしか出てこないということ、それから福井県下に食物系といいたまうか、家庭科といいたまうか、その中に食物科とか生活科とかあるのですけれども、この間お聞きしたのですけれども福井県内でどこか専門の高等学校の中には調理師の試験を受けられるようなまたは、取れるようなところもあるようですけれども、福井市内、この近辺にはないとのことですが、そういった配置のことまで専門高校には大事ではないかと考えます。

それから、看護科というのはあるのでしょうか。また、別の次元かも分かりませんが、看護師の学校がなくなったみたいですが、看護師というと準看というもの同士ごく扱いが違いますし、それから、さっきの測量士と測量士補と違いは勉強においてだけでなく、測量士は、測量するだけでなく、図面を描く建築事務所にも、どんな所へも就職できます。測量士補ではそうはいきません。それから今の調理師においても、調理師に挑戦するとなると衛生法から、調理法から今の病原菌からいろんな7科目等の勉強をしなければ受からないということになりますので、それによって目指す目標ももう少し高くしないと中途半端な職業系の高校に終わってしまうのではないかと思いますので、子どもの成長を図るような方法で、さっきもスペ

シャリストができましたけれども、スペシャリストにするのならそういう方向性に、福井県の高等学校としても中途半端でなくてももう少し資格となると語弊がありますが、勉強がもっと進んだことに役に立つ、これが一番いい方法ではないかと思っています。

城野副会長 はい、ありがとうございました。職業系高校の教育については、もう少し資格取得という点について充分取り入れたらというご意見でした。

中島課長 恐れ入ります。事務局から、今の清川委員のご発言に関連しまして、参考資料の2ページをご覧ください。そこに県立高校の各高校における職業系学科、専門学科の配置等について校名をそえて掲げさせてもらっております。3ページ目からは農業、工業、商業等という形でどのような学科でどのような勉強をしているかを資料として配布させてもらっておりますので、ご参考までによろしくお願いします。

城野副会長 はい、ありがとうございました。それでは資格取得がどれくらいできるかということとは調べられますか。

中島課長 今の測量士と測量士補の話はおっしゃるとおりでございます。

城野副会長 いろいろなご意見をお願いします。

さらに企業側といいますか、その方からみていわゆる職業系高校の教育内容というかご意見があれば、指名して恐縮ですが、加藤委員いかがでしょうか。企業の立場から見てもどうあるべきでしょうか。

加藤委員 私どもは高校生インターンシップも先日、受け入れをしまして高校生と話す機会があったのですが、どうでしょう、職業系高校、自分の選択した科目に対して何か目標というのですか、何か最初から持っていたのでしょうか。大変申し訳ありませんが、私、皆様教育関係の方々ばかりなので、大変ずれるかと思うのですけれども、中学校を卒業して高校を受験する時に、学校ってやはり点数でランク分けされていますよね。勉強が、点数が少し足りないのだけれど、自分はどうしてもこれをやりたい、技術の方が得意だという子はいると思うのです。けれど、学校と話をしてやはり点数が足りないとこの点数だとこの学校しかないぞ、みたいなことがあります。そこからして、この資料にもあるのですが、不本意入学というものも多少なりともあるのではないかなと思うのです。それでやはり自分がこれは得意だという学科に行けないとなるとやはり学習意欲の問題が起きてまいりますし、働くということ職業を持つということが何だということはやはり芽生えてこないのではないかなと思うのです。ですから、職業系、特にインターンシップで残念だったのは情報処理とかいろいろ科目から来られていたので将来の夢を聞いたのですけれども、したらある子が一人、とりあえず何も目標がないので進学をしますと話していましたね。就職系高校からインターンシップへ来て会社の経験はしているのですけれども、とりあえず何も目標がないので進学しますとのこの言葉にはちょっとショックを受けました。やはり、職業系へ入って何か小さいことでもいいので、目標を持って子どもたちが取組める内容というのが重要なのではないのでしょうか。やはり高校に入ってこの資格が取れる、がんばればこのような資格をとってこのような道にも進める、という何か指標みたいなものが子どもたちに示されれば、やはり子どもたちも3年間高校で学んでいるうちに希望なり自分の目標なり小さくても結構なのですが、見つけられるのではないかなと。高校入学のときの指導ですね、多少なり何か問題があるのではないかなと思うのですけれども、いかがでしょうか。

城野副会長 はい、ありがとうございました。今の若者の気質といいますか。これを表している

かと思うのですけれども、非常におっしゃるとおりで、何か目的を持ってほしいとのご意見でした。

今、実際に職業系高校側の立場から何かご意見をいただければありがたいのですけれども。国田先生いかがでしょうか。

国田委員 今、加藤委員様のご指摘でございますけれども、私も3月まで水産高校にいましたけれども、本校の場合もその傾向ははっきり言いましてあると思いますが、ただ、入ってきた生徒が、3年間の中で不本意な生徒もいますが、その中で卒業して行く頃には自分としてはある程度満足に近い感じで卒業していく生徒が割合多いのです。その面では水産高校の成果と考えますが、水産高校には、ある程度不本意な生徒にとって何か動機付けをしながら3年間、学べる生徒もいるとの印象を持っています。

城野副会長 はいありがとうございます。この課題に関しまして職業系高校でどういうことを教えればいいのか。満足させられるか。

国田先生、今、学生が割合満足感を持って育っていくためには、そのためにどのような教育をすべきかについて、いかがでしょうか。

国田委員 水産高校の場合には実験実習を教室での座学もあるのですが、知識や技術を定着させるために、なるべく実験実習を多く取り入れています。生徒も実習をする中で、こういうことだったのかということ体を認識します。そういうことで実習というものに重点をおいて水産高校ではやっています。

城野副会長 ありがとうございます。引き続きまして、農林高校について浅野先生。農林高校生には目的を持たせるためにどういう取組やっておられますか。

浅野委員 職業系高校は、学科が違って、学ぶ内容が違ってさほど変わらないのかなと思っております。本校でもやはり、実験実習、体験を重視しながら、身をもって学ぶというような教育方針を持っておりますので、その中で、確かに、入学するときは不本意で入ってきた生徒も、3年後には保護者もあわせて、大変よい学校生活を送れたということで卒業する生徒が多数でございます。先ほど、資格についてお話がありましたけれども、例えば、福井農林高校も、測量士、測量士補の資格に取り組んでおりまして、確か、ここ5年ほどで、測量士が3人ほど合格をしております。測量士補についても2年、3年で取り組み、2年生でまず、初挑戦をさせるのですけれども、37人1学級で合格者は今20人をきってしまうというような現実もございますが、やはり、以前は1クラス40人いますと、その中で27、28人合格するという状況の中で測量士を目指すというような体制の中でやっておりました。資格取得につきましても、学校で生徒の学ぶ喜びであるとか、それから学ぶ意欲を高めるための一つの方法として、それぞれの学科が目標を持って取り組ませております。

城野副会長 はい、ありがとうございます。清川委員がおっしゃたよりもう少し真剣に考えてやられているようです。それでは、先ほど食物学という話が出たのですが、谷先生いかがでしょうか。大学の立場からですが、職業系高校の中で食物学等も含めて、どのような教育をしていくべきかについてご意見をいただけないでしょうか。

谷委員 突然ですので、私も先ほど資格で調理師のことをおっしゃっておられましたけれども、やはり今、食育と関連付けて資格を取れるようにできたらいいのではないかと。また、私たちは職業系高校から栄養士とかを養成していますけれども、何かつながりがあり見られないのです。といいますのは入学試験があつて、ある程度点数を取っていないと入れない。評点がいくつとかという決まりがありますので。どうしても、

そのほうの専門性を学ばれた方が大学に来られて、ずっとつながっていくとすばらしい教育ができるのではないかと思うのですが。全然そうじゃない商業系あるいは違う方面から、普通科高校から来られてまた一から食の分野を最初からやらなければいけないというのが現状ですので、やはり、何かつながりができたらすばらしいと感じています。例えば、調理をしてこられた人が今度は栄養のことをというようにつながっていくとすごくいいなと日ごろから感じています。

城野副会長 ありがとうございました。そのほか何か、職業系高校でどのようなものを教えるべきか、どういうものを学ぶべきかについて何かご意見はございますか。

瀬尾委員 高問協の中では、職業系から進学する生徒が多いということも問題に上がっておりました。それをどうしていったらいいのかということもあったのですけれども、課題を解決するところまで話はいかなかったのですけれども、職業系生徒がAO入試で進学しますよね。進学して、普通科から来た生徒と大学でうまく成長してくれるかどうか疑問だということも出ておりました。そういった面を考えますと、職業系の高校ではやはり進学も考えた上で、現時点では授業をしていかねばいけない。そうすると専門性の時間が少なくなる。入試のこともしなければならなくなるということで、大変な時間があるということも問題に上がっておりましたし、この間、美浜でありました食育の高校選手権ですかね。それで優勝されました相可高校ですか、三重県の相可高校のことをテレビで特集しておりました。あそこは高校にレストランを持っておりまして、調理場もお客さんの方から全部見渡せるのですね。先生がいまして、お昼になると弁当を子どもたちに作らせるのですね。それを全部後ろから見て指導してやって、卒業すると地元でレストランを開業、調理師免許を取って卒業していくことを見ていまして、高校がここまでできるのかなという一つの疑問があったのです。ここまで職業系高校で、勉強させてやっているのだ、すごいなと。福井県でもできるかなと疑問だったのですけれども、そこまで果たして指導していいのかどうか、そのことはどうですかね。高校を卒業してすぐ、即社会に通用するのであれば徹底して指導すべきだと思うのですけれども、もう少し時間を置いて本当に卒業してから大学等またはいろんなところで勉強しながら、働きながら、では自分はこれで行くのだと言ってやっていくのがいいのか、そのところなのですけれども。

城野副会長 今のご意見に対して、ほかにないですか。

谷委員 あの、私も食関係ですので、非常に相可高校さんはすばらしいなと思うのですけれども、やはりいいか悪いかというのは別としまして、何かそういう目的をきちんとしているとすごく生徒が意欲的に取り組んで、それから一と深く勉強していくきっかけとなって、そこは全国から注目を浴びていますよね。確かに、その辺のところ、ちょっと勉強時間がどうなのかということがありますけれども、あれも、あれなりにやってもいいのではないかなという気もしますが、やれるのではないかなという気がします。浅野先生ところも皆さん結構やってらっしゃいますよね。

浅野委員 その高校の話は、実は私も全国の校長会へ行行って初めて知りまして、すばらしいなということで、ちょっと様子をお聞きしたのですが、部活動での取組みであるということで、平常の学習の中ではなくて、レストランを開業するのも土曜日、日曜日の休業日であるということで、私もびっくりしながらも、安心しまして、また学校独自でやられている訳ではなくて、やっぱりその地域の、たしか町上げて、行政が手伝ってくださっているのだと。そんな支援をいただいているということをお聞き

しながら、福井県だったら、行政もいいけれども、たとえば身近な大学であるとか、短大であるとかということと、互いに連携出来るともっと楽しいなと思いながら、谷先生と雑談をした覚えを、今、瀬尾委員からお聞きしまして、本当にいい取組であるなと思っていました。その学校の生徒たちは本当に、何といたしますか、目が輝いているというか、その休日を楽しみにしています。てんぷらを揚げる、そのコーナーの主任になれるということが、部活動の中でも目標にしているというか、そこまでいったら本当に超一流であるというような、生徒たちにも認識をもたれているような、そんなシステムを構築していらっしゃる。どなたがといわれると、非常に熱のある先生がやってらっしゃるということをお聞きしました。

城野副会長 はい、ありがとうございました。やはり、実際に職業系の高等学校の生徒さんに目的意識を持たせて、自信を持ってそれを身につけて、それで進路を決めていくのが非常に大事だろうということ。これは至極当然の意見ですが、これをやっていくには「言うは易し、行うが難し」ということがあるかと思うのですが、そのような教育を外からみていた場合、いかがでしょうか。松倉委員、どうでしょうか。学校の外から見て、今の職業系高校でどのようなことを教えればいいのかということ、何かありましたらお願いします。

松倉委員 職業系専門高校という、この専門という言葉に私はちょっと異議があるのですが、確かに15歳から18歳で、企業が求める人材のための教育というのは、私はあまり賛成ではありません。好きなことを突き詰めていくというチャンスは与えるべきですが、やっぱり教育というのはトータル的な人間のあり方というものを、究極は求めて欲しい。できれば、また、大学へ行く、その余地もしっかりと残しながらの教育、専門教育であってほしいと思いますよね。かつて、たとえば大学を出て社会人になって、企業へ入って5年も10年もかけて築き上げてきてですね、それを15歳から18歳のいわゆるこれからいろんなことを勉強しながら社会人になろうかと、なってほしいと思われる人に、あまり専門性に固執されるというのは、わたしはいかがかなという思いがします。いわゆる全体としてね。

城野副学長 ありがとうございます。こういう意見を会長さんにふるのは、本来いけないのだと思うのですが。

江守会長 そうですね、今のお話は非常に興味がありましたね。特に相可高校、その学生の意欲をかきたてながら前に進めていこうという、何といたしますかねえ、情熱ですかね。それが必要なんじゃないかと、私ども実は昔はですね、ほとんどが職業系高校卒業の生徒が日華化学の社員でした。大学卒が少なくて、そういう職業系の高校の生徒を会社の中軸に据えながら、世界に展開をしていったわけなのです。やはりその、昔の意気込みといいたいまいしょうかね、親もそうですけれども、先生方の意気込み、そこら辺がちょっといろんな意味において、私はもう少し相可高校に学ぶことがあるのではないかという具合に思います。最後に発言されました委員の方ですが、そんなに17、8歳ぐらいで全部と完結するようなことを、やるということが本当にいいのだろうかという疑問は理解いたします。ようはですね、もっと生徒に自信を持たせて、意欲を持たせてですね、前へ進んでいくパワーをどういう具合に、国、県、親、学校が、生徒に与えることができるのか。そこら辺をやはり、最近の高校、特に専門系高校を出てきて、私どもを支えてくれるのですけれども、いい子は非常にいます。いますけれども何かちょっと物足りない点がありますね。そういう意味で皆様方の貴重なご意見承っています。どんどんこういう意味合いでやっていただけ

れば、いい結論が出てくるのではないのでしょうか。

城野副会長 ありがとうございます。議事進行、申し訳なく、会長までお話いただき失礼しました。笠嶋委員どうぞ。

笠嶋委員 今のお話をいろいろ聞いておまして、相可高校は非常に有名ですね、もう3年、4年ほど前からそのようなことをやっけていまして、彼ら彼女らはですね、自分の出口進路先が見えるのですね、こういう風になれば、がんばればどこへ就職しますかと言えば、有名な料理料亭とかそこへ行きたいと希望をだしてやっけていますし、全国のコンクールに自分らでも中でも予選をして出るというようなことをやっけていて、出口が見えるから進路が見える、就職先が見えるということで、がんばれるのではないかなと思います。3年ほど経つと、点数で振り分けて入った子どもでも、出口・進路先が見えてくると一生懸命がらばるといふことがあると思うのですね。今、問題は、出口がよく分からないのではないかなと、とりあえず分からないからどっかに行くのと、私、産業労働部技幹ですけど工業センターの所長もしておまして、うちもインターンシップ受けておますし、どこに就職するか分からないからここへ来たという子どもおまして、福井県にはすばらしい産業がいくつもありましてですね、そういう所ではこういうことをやっけてるのだといふことを、自分の学んでいることがこういうことで生かせるのだといふのが少し分かりますね一生懸命勉強すると思います。ただ、だいたいが会社のネームバリューで就職して、あそこはいい会社だから就職するといふのがほとんど多いのですけど、実際は働いてみると、小さな会社でもですね、すごいものを作っけてると、そういうことが分かります、もう会社の中で一生懸命でやっけてですね、その人がなくてはならない存在になるといふ所があるので、福井にはすばらしい産業があつて働きたいがある場所があるのだといふことを、少し見せていく必要があるかなといふのが私の思ひです。産業労働部では、実は福井の技といふ企業100社ほど載せたやつですね、ものづくり企業100社ほど載せた冊子を作っけておますけれど、そういうすばらしい企業があるのだといふことを皆さんに我々は教へていく必要があるかなと思います。学校の先生方も、大いに工場見学とかですね、そういうことをされる方がいいのではないかなと、今私は思っている所です。以上です。

城野学長 ありがとうございます。大学の立場から清水先生いかがですか。

清水先生 大学の方でも、今、おっしやつた、生徒が目標を持ちにくいといふまさに同じ状況が起きておまして、何となく意欲が低下しているとか、あるいは何となく不本意入学のままだらだらと勉強しているといふ人が特に低学年では目立つのですね。これがやっぱりおっしやる様に学年が上がつてくると、それからインターンシップなどの職業経験を積んでいくと、だんだんやる気がでてくるという状態なのですけれども、おそらく専門として何を教へるかといふことと、それから人間として意欲を持った魅力的な人間になれるかといふ2本立てがあつて、我々大学では専門知識を教へるといふことが、大学の務めですからそれをしてるわけなのですけれども、学生が意欲を持った生き生きとした人になれるかといふのは、ある程度その人の問題でもある所があつて、専門教育をする中で学生にだんだん意欲が出てくれれば一番いいのですけど、なかなかそうでもない時もあるといふのが正直な所なのではないかなと思います。大学で見えておますと、インターンシップなんかは、かなりそういう意欲を高めるという意味では意味があるので、これからも受け入れてくださる産業界では大変ご苦労していただいていると思うのですが、インターンシップはこ

れからも推進できればという風に大学としては望んでおります。それからちょっと話がずれるのですが、職業系の生徒さんで進学率が非常に高いということも意見にでていましたが、県立大学では職業系から推薦入学という形で大学に入られた方のその後のパフォーマンスについて、普通科の学生とあまり変わらないという認識がほしい成立してしまっていて、ものすごく厳密な調査をしたという分けでは必ずしもないのですけれども、商業科の方が大勢県立大学にはみえるのですか、どうしても普通科と比べて履修していない科目があったりして、学力の面で何か入学後に苦労があるのではないかというような風に我々も少し思っていたのですが、必ずしもそうではないのですね。職業系の人の大学進学率がどんどん高まっていることをどう考えるかはなかなか難しい問題で、受け入れる側の大学としては、学業上のパフォーマンスとしては、大きくは変わらないという認識を持っています。だからといって進学をじゃんじゃんするのがいいのかというのは、また別問題かなと思うのですが、ちょっとまとまりがありません。

城野副会長

ありがとうございます。なかなか職業系で身をもってすぐに企業に結びつくのか、それより興味をもってそれを生かすために、進学をするのか、あるいは、私なんかはいわゆる大学で工学という狭い範囲を教えていますと、大学で学んだことが必ずしも企業へ行って、1対1には直結しないですね。ぜんぜん違う分野のことを、もちろん工学の分野だと捕らえればそうかもしれませんが、専門については全く変わってしまう。ただ何かそういう学校のところで、自分でやるという方向を見つけておくと、それが次に生かされる。そういうことがありますので、やはり職業系高校においても、必ず専門的というよりはむしろ、そういうものに興味を持って、そのことをやるという手段、そういうものを身につけるのが大事かと思うのですが、高等学校のお立場で巨田先生いかがでしょうか、何かご意見はないでしょうか。

巨田委員

私は私立高校の立場でございますが、先ほどの不本意入学と申しますか、これは県立高校以上にも厳しいものがございます。しかし、昨年度ですね、文部科学省のものづくり人材育成事業というものを、これは高校教育課のご努力でとっていただきまして、その中へ県立高校と同じように私どもも一校入れていただきまして、3校でそれを取組んでおります。これは、次年度まで続くわけでございますが、この事業に参加させていただいて、これは本当に非常によかったなと感じております。経営者協会の大変なご尽力で、インターンシップも非常に充実した形で行っております。ただ、これは企業とか地域の産業の方にご迷惑をおかけしている面も多々あるのではないかと、お忙しく、今非常に厳しい状況の中で、高校生がいろんなことで、お世話になるということは、企業側にとりましても、非常に厳しいのではないのかと思います。このような中で私どもの学校を考えますと、やっぱり私立も公立もなく、福井県の子どもたちをどう育てていくかということで、ご尽力をいただいています。これがやはり不本意入学とか、目標をあまりはっきりしない生徒にも大きな励みになって、いろんなことを最先端で学んでいくことができるので、非常にありがたいと思っています。

2点目は、これは私どもの学校に限ってですけれども、先生方が非常に熱心にしていただいていますけど、時代が非常なスピードで動いていきます。したがって、高問協の答申にありましたが、一般社会と学校との格差といいますか、これは非常に学校が遅れているのではないかというお話をいただいています。これも先ほどのその連携事業の中で、優秀な方にいろいろ教えていただき、こういうことをするこ

とによって教員自体の勉強にもなりますし、それからいろんな面でのレベルアップといえますか、それにつながっていくので、この点もありがたいなと思います。3年間で切れるのですけども、この後も是非、いろんな形で続けていただければいいと、感じがしています。

3点目ですけれども、私は、公立校にもおりましたので、公立私立を両方見させていただいているわけですが、もっと公立の先生と私立の先生との交流があってもいいかな。極端にいいますと人事交流も含めて、いろいろやっていくことによって、職業系の専門学科のレベルも他の県に負けない、もっともっとレベルアップしていくのではないかと、そういう風なのを今感じています。就職のときは、コンピュータとか建築とかわかれているのですが、実際にどんな生徒が欲しいかというところは問いませんが、元気でがんばっている生徒がほしいとの意見がございます。専門学校という区切りをつけて一般教養も含めながら、いかに人間性を高めて、そして地域に、いろんなところで貢献できるような人間、人材育成というものを、しっかりとやっていかななくてはけません。その根底をなすものはキャリア教育ということで、私どもはキャリア教育というものを、一度根本から見直して進めて参りたいなと思います。ちょっと長くなりました。申し訳ありません。

城野副会長
増永委員

ありがとうございました。はい、どうぞ。

中小企業に関係している立場から申し上げます。福井県、日本も当然ですけども福井県はほとんどが中小企業です。中小企業の範囲は相当ありますけれども、その中で学校の専門教育をされるレベルは決して低くないと思います。非常に高いレベルを持っていながら、なかなかマッチングしない。歯車が企業側とかみ合っていないところが若干あるのではないかと思います。これは時代の一つの変化で先ほどのお話にありましたけれども、企業側にとりまして大変厳しい状況にあります。就職をされてそれからしっかり教えながら、企業戦略に使うということは大変な状況に、また、対応できないということになるわけです。それから、生徒も入社し、自分は自信を持って入ったけれども、基礎を学んできたけれども中味が違う。中味が違うというのはそれだけ多様化している、そんなことがあると思います。そういうところの中で、中小企業が育たないと福井の産業界は成り立たちませんし、日本の産業界も当然、同じことです。そういう点でもう少し、インターンシップをやって、どんどんやってはいるのですけど、いわゆる産と学とがもう少し連携をしてやってほしい。例えば、昨日こんなことがありました。22日に宮城県仙台市に行きました。ちょうどそのときに中小企業の全国大会がありまして、そのあくる日の新聞に、中小企業の戦力育成促進力という記事が出ていました。これは、今日の会議にマッチしていることが書かれていました。また、後ほど見ていただければいいと思います。宮城県は教育のレベルが高く、教育に力を入れた県でありまして、非常に教育熱心でありますから、若者がものすごく増えています。100万政令都市になっていますけど、町の真ん中は若者でいっぱいです。したがって、若者を企業に結びつけるということを一生懸命やっているらしいのですが、かみ合わないことがあると、今日皆さんお話しされたことと全く同じことを言っているそうです。その状況から企業が、企業のいるOB、先輩が、学校へ行って、例えば測量士の資格を取れば、私は資格をとったぞというのではなくして、それが企業に一致しないとだめなので、企業が学校へ行って、後輩にこういうことを私の会社はやっている、専門的にはこういうものがないと社内では通用しないぞと、そういう教育をやるのだと、いわ

ゆる産学連携をやっていくというようなことが書いてありました。なるほどこれは今日の会議の資料になるといいかなと、思いました。朝日新聞ですね、朝日新聞の21日土曜日の新聞の地方版だと思います。こういったことをもう少し専門教育の中で、産と学が連携していくこのことがあれば、もう少しかみ合いがよくなって成功するのではないかと考えています。

城野副会長 どうもありがとうございます。そのようなお話がありましたが、実際に例えば県立の科学技術高等学校の松山先生、そういう実際の企業との連携、インターンシップはもちろんあると思いますが、それ以外に何かありますでしょうか。

尾形総括 副会長、お願いします。議事の途中ではございますけれども、江守会長所用のため退席させていただきたいと思っておりますので、ひとつよろしく願いいたします。

江守会長 では、よろしく申し上げます。

松山委員 よろしいですか。企業との連携に限ってお話させていただきますと、今お話ありましたようにインターンシップとか、卒業生が来て、いろいろ話をするということは、当然どこの学校でもやっています。うちだけではありません。卒業生と語る会ということで、企業に就職した卒業生、あるいは進学した卒業生を年に何名か呼んで、意識付けのため、職業の内容のことを話してもらうことをやっています。それから、今非常にありがたいことに、さっき巨田先生もおっしゃいましたが、県のほうが中心になっていただきまして、ものづくり人材育成ということで、企業と連携しながら、今年取組んでいますのは、機械系に限定してのお話なのですが、企業へ行って、一番長い生徒で10日ぐらい、夏休みに企業研修をさせていただきました。インターンシップとはまた別でございます。インターンシップは2年生全員が3日間行くのですが、夏休みに短い生徒で3日、長い生徒で10日ぐらい、企業へお邪魔して企業の方と同じ時間帯で、仕事させていただいています。非常に勉強になっていきます。それからいろんな技術を指導していただくということで、企業へ行って学びますが、企業の方が学校へ指導に来ていただく、あるいは教員が企業へ生徒を連れて、教員も一緒に勉強をする、そういう機会もたくさん持っていただきまして、ここ2年間やっているのですが、非常に技術的あるいは技能的に、飛躍的に伸びたのではないかと考えています。ただこれ、3年間の事業でありまして、それ終わった後はどうなるかわからないということでございます。

城野副会長 すいません。ちょっと時間もありますので。

松山委員 はい、企業との連携でいいと思いますとこれだけです。

城野副会長 まだまだ、ご意見をいただきたいのですが、論点が3つありまして、今日は少なくとも2つまでは進めて欲しいということでございますので、必ずしもまとめて、一つのものにするというよりは、皆さんのご意見を伺いながら、その中からどうすべきか後でまたまとめていただいて、進めていけばいいかと思っておりますので、1でこういう結論だということを必ずしも出さなくてもいいということですので、そのようにさせていただきますが、今、皆さんからご意見いただきましたように、職業系高校においては目的意識を持たず。そのためには企業と連携あるいは実際にもものを教えるというようなことが非常に大事だということ。それをやりながら生徒さんの進路を適切に指導していく、あるいはその中で人間教育もしていくということが大事だというご意見を賜ったかと思っております。本来、田中先生にお伺いすべきところですが、次のところでご意見を伺います。そのようなことで、よろしければ時間の関係がございまして、2のところに移らせていただきますが、よろしいでございますか。

何か、1に関して是非ということがございましたら。

それでは、関連するとは思いますが、2のほうはですね、地域の特色を生かした総合産業高校の学科はどうあるべきかという話のご意見を伺いたいということでございます。ここではいわゆる総合産業高校、それから拠点校が高問協の答申にあったわけでありまして。もし、事務局のほうから拠点校と総合産業高校との明確な違い、あるいは同じなのはどのような点か、ちょっと説明をいただいで、議論が進めたいと思います。

○論点2 協議

中島課長

はい、では、お願いいたします。拠点校は、基本的に少子化が進む中で、大きな社会の変化の中での対応をどうするかという考え方の中で、工業と商業と農業については、1校にいろんな学科を、例えば工業の拠点校は、県下にある工業高校の中で基本的な学科をできる限り取り入れてやりたい。そこで取り入れた状況で総合産業高校、あるいは大学、あるいは中学校との連携、交流ですね、つまりセンター的役割を果たす高校にしていきたいのが、拠点校の目指すべき方向性ということが1点。それに対しまして、奥越とか嶺南とか、いわゆる生徒が減っていく中では、1校ではなかなか成立が難しいということが前提でございます。その中で、工業、商業、家庭学科等のいくつかを含む高校を作らしていただいで、そこでのメリットは地域の中での高校というのが1点。もう1点が先ほどいいましたが、そういう基本的な核になる専門を学ぶ中で、もう少し他学科も、例えば工業学科の生徒が一部農業を勉強するとか、そのメリットを持たせた高校を総合産業高校と位置付けさせてもらっています。以上です。

城野副会長

ありがとうございます。以上のようなことでございます。ここで与えられておりますのは、地域の特色を生かしたいいわゆる総合産業高校、その中にいろいろな職業系学科があり、ひとつの高等学校を作る話でございます。そのためには今各地域にどんな高等学校があり、どういう職業系の学科があるのかというのは、先ほどご説明ありました参考資料の2ページの所に、どのようなものが今あるのかということとは分かります。したがって、この問題は、やはり地域を限って議論をすると、わりあいに明確になると思うのですが、今日はどこの地域とやりますと、それだけの時間がございませんので、むしろ地域の方は外しまして、やはり総合産業高校として、こんなものがやはり福井県として欲しいのではないかとということがありましたら、そういうようなご議論をいただけたらと思います。先ほど随分ご指名をさせていただいて、今回はできるだけご自由にご意見をいただきたいと思いますが、先ほどは田中先生だけご指名しなくて、時間の関係で申し訳ございませんでしたが、田中先生、口火をきっていただけたらと思います。

田中委員

総合産業高校については、いくつかの学科を揃えるということだろうと思うのですが、本県にも既に、参考資料の2ページにありますように、3校ほどあるかと思えます。若狭東高校に農業と工業、大野東高校に工業と厚生、勝山南高校に商業と家庭、このあたりが若干それに類するのかなと、ここにもう一つ二つと揃えてということだろうと思うのですが、私はまだイメージがわからないのですが、ただ揃える場合にただ何でも揃えればよいという訳ではないと思います。やっぱりそれなりに学科と、他の学科とのつながりというのでしょうか、生徒が他の学科の科目を学ぶわけですから、学ぼうという気がおきないといけないわけですから、そのためにはた

だ漠然とたくさんの学科を集めればよいという気はいたしません、それなりの関連性のある学科にして欲しいという気はいたします。先ほど高校教育課長さんが話しましたように、奥越地区、嶺南地区は拠点校は成り立たないという、そういう所には、なるほどいいかなという気はいたします。また、資料の中に他県の状況もあり、高問協の答申を勉強させてもらいましたけれども、他県の状況の詳しい説明もしていただければありがたいなと思います。特に興味あるのは、同じ地区の北信越で、全国的な状況もそうですが、北信越地区で総合産業高校を作っている県、ここにちょうど石川県と長野県の例が出ておりますので、こういう所の説明もしていただければありがたいなと思います。以上です。

城野副会長 ありがとうございます。非常にご議論をしていくポイントについて明快にご説明をいただきました。他県につきましては、この答申の43ページの所に、確か表があったかと思います。今後、また事務局の方から他県についての状況説明をいただきたいと思いますが、今日は時間の都合上、むしろ皆様方から今いただいたように、こういう総合産業高校というものを設置するとすれば、どのような視点が必要か、あるいは福井県としてこんなものがあつたらいいのではないかというようなことを、ご提案いただければ、あるいは次回にもう少しそれを深められるかと思しますので、どうぞご自由にご発言ください。あまり進行係が、指名ばかりしましてもよくないかと思いますので。

松山委員 失礼します。科学技術高校の松山ですが、今、総合産業高校の件で嶺南のお話ができました。その中で、今、就職状況とかをいろいろと考えてみますと、特に、私がイメージの中にありますのは、以前におりました敦賀工業高校がよくわかるのですが、エネルギー関係、電力関係ですね、そちらへ就職する生徒が大半を占めています。地域で活躍できるということもありまして、就職も非常にスムーズにいています。ですから嶺南では、環境、それから安全を含めたエネルギーですね、そういったことを学べる科がやはり必要ではないかと思っているのですが、それを一つの科として設定するということには、色々問題があると思います。今言いました環境エネルギーに関しましても、化学のことでもありますとか、機械、電気、情報、あるいは土木建設あたりもからんでくる総合的なことになりますので、それを一つの科して取り上げるということは非常に難しいので、私自身は具体的な科名とか、案はもっていないのですが、やはり地域として必要とされ、勉強ができる学科といますか、やはり考えていくべきでないかと思っております。

城野副会長 ありがとうございます。全然指名しないと言いながら、今、敦賀、若狭の方の話が出ましたので、国田先生、水産という立場を知っておられますので嶺南の話ではどうでしょうか。

国田委員 嶺南地域は、特に、水産海洋関係のネットワーク、県立大学の小浜キャンパスがあり、福井県の栽培漁業センターがあり、昔は国だったので、もうひとつの栽培漁業センターがあります。そこに、また水産高校があり、敦賀には水産試験場あります。こういう中で、これだけ水産海業のネットワークがあるのは日本でも珍しいです。そういうことで、できたらこれをもっときちんとネットワークをはり、活用していけたらと思、さらにその中で水産高校がどのような役割を演じられるのかなということを考えております。

城野副会長 ありがとうございます。その他いかがでございましょうか。企業側から見て総合産業高等学校というのは、どのような印象、どうあるべきかとお考えでしょうか。

増永委員 決して悪いことではないという気がします。例えば、私は繊維関係をやっていますが、昔の繊維と今の繊維というのは、全然違っておまして、例えば農業であり、全ての分野に、宇宙から土木から、全ての分野に繊維というのは携わっております。総合産業高校はいろんな専門学科を1箇所にかけて、その中に繊維というものを取り入れていただければ非常にありがたいと考えます。これは統計にでておまして、この間も、ショッキングな話ですが、これは現実ですから申し上げます。例えば、東京の超一流1万人学生、文化のある学校なのですけど、私の業界もだんだんと少子高齢化でなかなか人がおりません。いわゆる次世代、誰もオーナーがいない。そうなので循環という業界を考えておまして、あそこに行きまして教員と話しましたら、1万人の学生がおりますけれども、ずっとあそこは1万人学生でやっておりますけれども、残念ながらテキスタイルに志願してくる学生はどんどんと減りまして、志願学生が1人もいませんので今年もう廃科にした、こういうのですね。では、皆どこにいったのですか、1万人いる生徒は何をしているのですかと言ったら、ここに科学技術高校のテキスタイルデザイン科がありますけれども、ここにも生徒がいないのです。では、今後、ファッション関係はどうしていくのですか、専門の学校は、いやはや、これはもう本当に苦しんでいます。これもどんどんと減っています。あとの人は何科を選考するのですか。ただ物を買って売ってみたい、あまりにも単純な考えですが、市場原理に動かすすぎたのか分かりませんが、こればかりにどんどんと増えています。本来の学校の姿勢からいくとやや勇退しています。考え方が他の方に行くのではないですかと、先日も教員と話したことがあるのですが。テキスタイルデザイン科の卒業生がたまたま1人おります、是非とも1人は福井の方に紹介します。なぜ、1人だけいるのですかと言ったら、姉さん、兄さんがいわゆる物を売る方に入っていますので、妹さんはお前は物を作る方に入れよと、いうことで2人で独立してやろうと、こんな内容しか、全国的に情けない話しか人がいないのですということ、ちょっと耳にしたのですが、それでも、福井は来て欲しいな思いますね。

副会長 ありがとうございます。続いて企業側ということで、清川委員いかがでしょうか。総合産業高校はどうあるべきか。

清川委員 はい、この商工会議所でも、我々機械関係でも、業界でも、原子力に注目しているのですね。福井工業大学と福井大学は原子力関連の学科が出来たのですね。ところが、我々産業界では、15基の原発の中で一つもそういった意味でいくと、まだ仕事として参入したことがない、ほとんど県外の業者が入って来ているのです。高校生がどれだけ職業系で選択されて、原子力に入っているか分かりませんが、そういった系統立てるためにも、さっきおっしゃっていただきましたけれども、本当に高・大学のつながり、これによって就職にも活用できるような原子力を含めた学科もこれからは必要であると考えます。

城野副会長 原子力、エネルギーということですね。加藤委員いかがでしょうか。企業のお立場から見て、もし、今の福井にこんな学科があった方がいいのではないかと、総合産業高校として、今ここまでにあがっている学科や、こういった学科があった方がいいのではないかと、ないでしょうか。

加藤委員 いただいた資料をちょっと読ませていただいた時に、県内の色々書いてあったのですが、その中に新しい学科が目につきました。福井県はいろいろ学校も変わってきております以前と、変化にともなうやってくると思うのですが、私は具体的に何

の学科がいいのだらうと言われた時まだ分からないのですが、私が今勤めているのが繊維会社なのですが、福井県は繊維が非常に盛んな県なのですが、あいにく繊維という学科がありません。今全体の学科を初めて見せていただいて、繊維という学科がないのですね。地場産業でもありますので、繊維も多様化してきております、先ほどのご意見もあったように、私どもの繊維のものは、靴にもつけば鞆にもつく、さらに産業資材にも使われていくような発展をとげておりますので、やはり先のことを見据えて、そういった地場産業を強くしていくというのも一つであると感じます。

城野副会長 ありがとうございます。司会がまずくて、1の方に時間を取りすぎて、2の方がまだ途中だと思うのですが、予定の時間が過ぎてしまっております。2についてですね、少しご意見が、今、ございましたらいただきたいと思います。次の3が本県の高校において設置が望ましい学科はどういうものかというようなタイトルになっておりますので、その中に総合産業高校の中にエネルギーの学科というのも入ってくるかと思っておりますので、もし今日ご意見なければ、一応このぐらいでとめさせていただきます。初めにいただいた資料ですと、2回ぐらい皆さんに意見をお伺いしてとなっておりますので、このような進め方で、非常にまずい進め方でしたが、事務局よろしいでございますか。

今日、何か他にご意見ございますか。よろしいでございますか。特に、ここで、結論はこうだというとりまとめは、初めに申し上げたように立場上させていただきませんけれども、いろいろといただいたご意見を総合いたしますと、1につきましてはイメージが浮かび上がってくると思えますし、2についてはいくつか披露いただいた中には、エネルギーそれから繊維関係の話、それらについては次回にご意見をいただきながら、具体的に新しい学科をどんなものがいいだろうかとお考えいただき、議論させていただくその方がいいかと思っておりますので、非常に、まずい司会ではありましたが、一応ここで本日の審議会として皆さんのご意見をいただくのは終わらせて、閉じさせていただき、事務局に進行をお返しいたします。ありがとうございました。

広部教育長 いろいろと活発にご議論いただきまして、ありがとうございました。私どもできれば、この3月いっぱい、年度末ぐらいを目途にしまして、全体の高校再編等の青写真的なものを作っていくたいと思っております。特に近々の課題であります、奥越地区につきましては、生徒数減の現象が非常に激しいものですから、特に奥越地区のみにつきましては実施計画的なものを年度末くらいまでに作っていくたいと思っております。皆様方のご意見等を参考にしながらやらせていただきたいと考えておりますので、どうかよろしくお願いを申し上げます。今日はありがとうございました。

尾方補佐 なお、本日の議事録につきましては、事務局で整理いたしまして、高校教育課のホームページに掲載させていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。最後に、今後のスケジュールでございますが、次回、第2回の会議につきましては、委員の皆様方と改めて日程調整をさせていただきますので、どうかよろしくお願いたします。それでは、これをもちまして第1回会議を閉会とさせていただきます。本日は大変お忙しい中、どうもありがとうございました。